

私を育てた
あの時代、あの出会い

第13回

「師弟同行」という恩師の言葉で 教えることの基本を学んだ

千葉県 野田市立福田中学校校長 大関健道 OZeki Kenmichi

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、大関校長が語る。

生徒と同じ行いをし、真摯に
向き合う大切さを学んだ

初めて担任を受け持ったのは、教師2年目のことです。当時は校内暴力が吹き荒れており、人気だった学園ドラマの影響からか、卒業間際の3年生が木刀を持って放送室を占拠するような時代でした。そんな先輩の姿を見ていた2年生の生徒たちが、3年生になった1学期に机や椅子を教室の窓から放り投げ、教師みんなで止めに入るといふこともありました。まさに体当たりの毎日。当時の倉持治校長は、先生方を信頼し任せ

てくれました。その信頼に応えて何とか突破口を見つけようと、生徒とのかかわり方を模索する日々でした。そんな状況も一段落した2年後、着任した小澤一元校長から言われたのが、「師弟同行」という言葉でした。「生徒と同じ行いをして一緒に歩むことが大切」という意味です。ある年度の始め、トイレ掃除を嫌がる男子生徒がいました。私は怒りたいたい気持ちを抑えて、「一緒にやろう」と生徒を誘い、率先して便器や床の掃除を行いました。すると、最初は嫌がっていた生徒が、1週間が経つ頃には、便器の内側までぞうきんで



おおぜき・けんみち 専門教科は理科(地学)。千葉県柏市立柏中学校、野田市立第一中学校、野田市立川間中学校、野田市教育委員会指導課指導主事、(独)科学技術振興機構理科教育支援センター主任アナリストなどを経て、現職。

1981(昭和56)
千葉県柏市立柏中学校
に新採で赴任

1982(昭和57)
母校である野田市立
第一中学校に赴任

1989(平成元)
野田市立川間中学校
に赴任。1994年度の
千葉県長期研修生
として筑波大で学ぶ

1995(平成7)
野田市立福田中学校
に赴任。全校で
構成的グループ・
エンカウンターの
実践に取り組む

2002(平成14)
野田市教育委員会
指導課指導主事に着任。
野田市教育環境整備
事業や文部科学省
新教育システム開発
プログラム事業に
取り組む

2008(平成20)
野田市立第二中学校に
教頭として赴任。
キャリア教育優良実践校
として表彰を受ける

2010(平成22)
(独)科学技術振興
機構理科教育支援
センターの主任アナリス
トとして出向

2012(平成24)
野田市立福田中学校に
校長として赴任。
学校支援地域本部
事業を生かして
地域と共に歩む
学校づくりを推進

*プロフィールは2013年3月時点のものです

「学び、成長し続けることで 1つのモデルを示したい」



きれいにするようになったのです。生徒に命令し、無理にやらせるのは簡単です。しかし、それでは生徒との信頼関係は築けません。掃除だけでなく、鬼ごっこのような遊びまで一緒にやることで、生徒は良い意味で教師を「仲間」だと考えてくれるようになります。また、生徒と同じ行いをするので、生徒に対して1つの「モデル」を示すこともできます。小澤校長は、「師弟同行」という言葉を通して、「教える」こと

の基本を伝えてくれたと思います。「師弟同行」を実践するうちに、私は、教師が生徒と共に活動をすることで、生徒が変わるという手ごたえを徐々に感じるようになりました。しかし、不登校の生徒とのかかわり方には、悩み続けました。生徒の家に行き、ベッドから引きずり出して無理に学校に連れていこうとしたこともありません。ただ、「もつと生徒の心に寄り添う、別の方法があるのではないか」という思いは、常に

私の中にありました。

転機になったのは、ある生徒が2年生の秋に、不登校になった時のことです。何度も家庭訪問を繰り返しましたが、なかなか心を開いてくれません。悩む私を見て、当時の大相平八郎教頭が紹介してくれたのが、市の専門機関で教育相談を担当していた若松律子先生でした。

若松先生は、まず生徒に手紙によるカウンセリングを行いました。そして、生徒が市の相談機関まで通えるようになった3年生の6月頃、私にアドバイスしてくれたのです。1つは、担任として気持ちを十分理解してあげられなかったことを生徒にわびること。もう1つは、がんばって相談機関に通っていることを褒め、うれしいという気持ちを伝えることでした。私はその意味を考えつつ、生徒に手紙を書き、次に直接会って気持ちを伝えました。すると、生徒は徐々に、私にいろいろなことを話してくれるようになり、秋から毎日、登校するようになったのです。

若松先生には、生徒へのかかわり方や、行動を起こす時のタイミングなど、さまざまなことを教えていただきました。時にはカウンセラーな

どの専門家と連携することで、生徒を良い方向に導けることも、身を以て学びました。そして、もっと本格的に勉強したいと、筑波大の松原達哉教授（当時）が主宰するカウンセリング研究会に参加するようになりしました。この研究会への参加がきっかけで、カウンセリング心理学の國分康孝先生や学校心理学の石隈利紀先生に出会い、多くのことを学ばせていただきました。

共に生徒とかわり、 現場の教師と一緒に歩む

校長という立場になりましたが、自分の言動を振り返って反省し、「あれで良かったのだ」と言い聞かせたり、「本当にあれで良かったのだろうか」と思い悩んだりすることが少なくありません。だからこそ、あらゆる人やもの、自然・森羅万象から学ぼうとする「謙虚なこころ」を持ち続けることが大切だと思うのです。

今、学校現場では若手教師の人材育成が急務です。これからも自分自身が学び、成長し続け、共に生徒とかわっていくことによって、教師としての1つのモデルを、先生方に示していければと思っています。